

東京、2002年6月10日

ドミニクへ、

日本人達は眠っている。

歩道の角、大衆が押し戻される場所、時には移動の神経質な流れが人々の脚を止め、ショック状態のように、数分間の平安を得て人々は穏やかになり、バスや電車の中で、日本人は眠る。

彼らはただ休んでいるのではないように僕には思える。頭は重みで垂れ下がり、頬は重い。退屈な現代性に幻滅したヒーローが、添え木となった物体によりかかる。眠りの方が突然彼らを襲い、彼らを宙づりにする。結局は受け入れられることになる矛盾のうねりに揺られ、定期的に幻滅がおこすローリングに揺られ、自分の親密な空間が常に多くの他人のそれと擦れ合い、彼らは眠る、気遣いですり切れた魂、疲れた表情の平安。

歌舞伎の大御所中村富十郎も言った事だろう。「疲れや努力をごまかしてはならない。役者の芸とは天の創造物の羽衣と同じで、目に見える繕いがあるとはならない。」と。現代日本社会の繕いは目に見える。そして創造物達が持つ唯一の天上のものとは、彼ら人間の条件として与えられた永遠の悲劇のみだ。その悲劇は日常としてあり、水たまりの美と同じように目にはつかない。

もののあわれ」と日本でいうものと同じ響きをもつものに、クリスティーヌ・ビュチ・グルックスマンがその著書「日本の時間の美しさ」の中で「新イカロス主義」と言うところの、寝る時間がある。

メルロ・ポンティは確かよれた襟にエロティズムを感じると言っていたと思うが、それと同様に、天照大神の現代の臣下の隈のある顔やシワの寄った額、疲れ切った肩に内在する不動のものを僕は見ることができる。

友情を込めてエリック、

Copyright©Eric Van Hove - all rights reserved